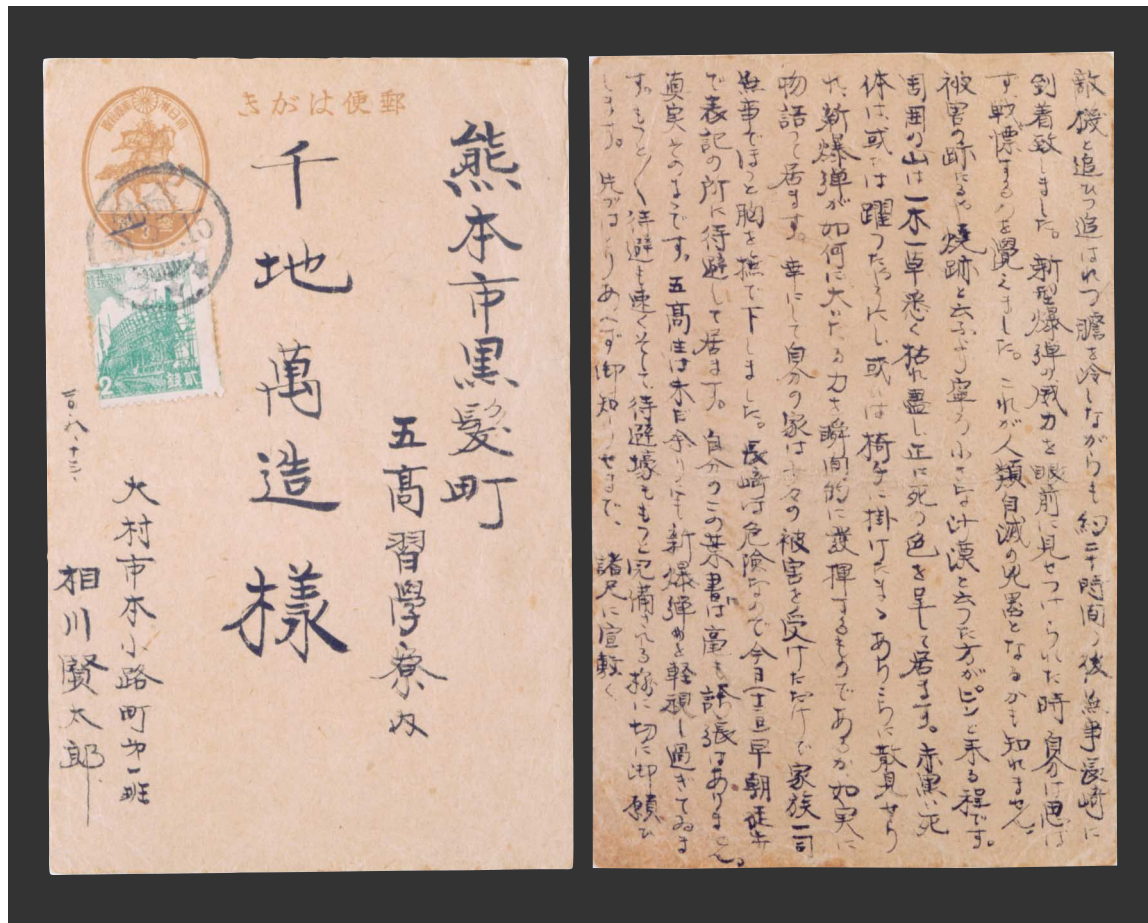


原爆の悲惨さをいち早く伝えた「はがき」



このはがきは、長崎に原爆が投下された直後に大村市内のポストに投函され、数日後に熊本まで配達されたはがきです。

当時、第五高等学校の2年生であった相川賢太郎氏（株三菱重工業相談役）が、郷里の長崎から新型爆弾（原子爆弾）が投下された状況を熊本にいる同級生の千地万造氏（理学博士 元大阪市立自然史博物館館長）に知らせたものです。

その文面には、人類滅亡まで予感させる戦慄するような悲惨な状況が生々しく書かれており、非人道的な原爆の姿を現在に伝える貴重な資料となっています。

大村郵便局消印の日付は8月15日、まさに終戦の日であり、この非常時にも郵便局は立派に役目を果たしていたのだと、このはがきは教えてくれています。

（表紙解説）

東海道五拾三次之内 蒲原 夜之雪

静かに雪が降りしきる蒲原宿の夜の景色が、墨絵のように描かれている。シリーズ中でも「庄野」と共に傑作として評価の高い作品であり、昭和35年の国際文通週間切手の図柄となっている。

あまり雪の降らない蒲原宿を、広重がなぜ夜の雪景色として描いたのかはなぞであり、描かれた場所についても諸説があるが、まぎれもなく最高に美しい日本の風景である。

（所蔵資料紹介・表紙解説 附属資料館 井上卓朗）